A ちゃんに対する食具の検討

かがわ総合リハビリテーション病院　リハビリテーション部　作業療法士　間島　礼香

キーワード：運動発達遅滞、食事、食具、発達

要　旨

平成 29 年 10 月～12 月の 3 ヵ月間、スプーンの操作が苦手でこぼすことを気にする東病棟入所児 A ちゃんに対し、食事訓練で食具を検討した。食具の変更に伴い、訓練中に食べ物をこぼす回数が減少した。A ちゃんの上肢機能に合わせて食具を選定したことで、こぼす回数が減少したと考える。

1.　はじめに

平成 29 年 10 月～12 月の 3 ヵ月間、スプーンの操作が苦手でこぼすことを気にするAちゃんに対し、食事訓練で食具を検討した。食具の変更に伴い、訓練中に食べ物をこぼす回数が減少した。そこで、経過から食具の変更とこぼす回数の減少について考察する。

2.　症例紹介

年齢・性別：6 歳、女児

疾患名：運動発達遅滞

現病歴：在胎 38 週にて出生。高度新生児遷延性高血圧にて吸入療法を行う。原発性肺高血圧症、心房中隔欠損症に対して生後 8 ヵ月まで酸素療法を行っていた。その後、運動発達遅延の指摘があり、自宅療養されていた。母の精神状態が不安定で自宅療育が困難となり、1 歳 6 ヵ月で東病棟へ契約入所となる。2 歳 9 ヵ月より上肢機能・ADL の維持目的で作業療法開始となる。

3.　倫理的配慮

本研究は、かがわ総合リハビリテーションセンターの倫理委員会で承認を得たものである。また、家族へ本研究の内容を説明し同意を得ている。

4.　初期評価（平成 29 年 5 月 25 日）

MAT(上肢運動年齢検査)：左右とも 1 歳 6 ヵ月

MCC 乳幼児精神発達検査：精神年齢 1 歳 6 ヵ月

ADL（病棟）：

（移動）車椅子介助。近位監視で車椅子自走や AFO を装着して介助歩行が可能。床上では四つ這い移動が可能。

（更衣）かぶりシャツを脱ぐことが出来る。衣服を着る動作は介助が必要。靴・靴下を脱ぐ動作は自立。

（食事）車椅子座位。カットアウトテーブル使用。準備、皿にのせる量の調整は介助。食物をこぼしやすく時間がかかる。食事形態は、幼児嚥下食Ⅱ（一口大半。水分はとろみなしで、コップ飲みが可能。

5.　方法

(期間：平成 29 年 10 月～平成 29 年 12 月)

作業療法で行っている週 1 回の食事訓練にて実施した。10 月 17 日～11 月 9 日を第Ⅰ期とし、皿の変更を行った。12 月 5 日～12 月 26 日を第Ⅱ期として、スプーンの変更を行った。食具の検討前と第Ⅰ期・第Ⅱ期に分けて経過を述べる。

＜食具の検討前＞

(1) 道具について

①皿（写真 1）

直径 10 ㎝、高さ 4 ㎝の小さい皿で縁は丸い物を使用。

②スプーン（写真 2）

スプーンに太柄のフォームラバー（直径 2 ㎝、長さ 9 ㎝）を装着した物を使用。

(2) 食事動作について

①スプーン把持

スプーンの柄の遠位部分を前腕回内握りで把持している。環・小指は手掌内で握り込み、母指・示指・中指で太柄のフォームラバーを握り込んだ状態で不安定であった。

②すくう動作

手関節掌屈位にして皿の内側縁に沿って奥から手前に円を描くような動作で食物をすくう。こぼす回数は 8～9 回であった。

＜第 I 期＞平成 29 年 10 月 17 日～11 月 9 日

第 I 期では、皿の変更を行った。

皿を変更する上で、二つの問題点を考えた。一つ目は、スプーンに食物をのせるための手関節の動きが不十分である事である。二つ目は、内側縁に沿って円を描いてすくうためスプーンに食物がのらずに滑り続けていた事である。そこで、皿底に添って左右にすくい、スプーンを壁に当てることで、スプーンに食物がのりやすくなると考えた。これより、皿の変更と訓練を行った。

［食具］

すくいやすい皿（直径 20 ㎝、高さ 4 ㎝）に変更。（写真 3）皿底は傾斜し、深い方の縁は内側へカーブしている。（写真 4）

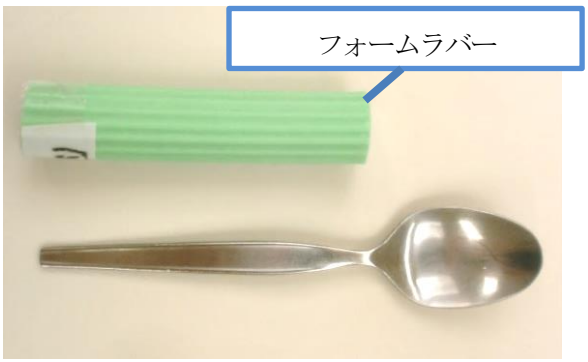
［訓練］

食事訓練ですくいやすい皿を使用し、すくう動作を誘導した。さらに、個別訓練では、すくう動作の模擬練習を行った。

［結果］

スプーンを皿底に沿って側方へ滑らせる場面が多くなった。皿の縁の反り返りを使い、すくいやすくなった。こぼす回数は 4～5 回であった。

（写真 1）皿



（写真 2）スプーン、フォームラバー

（写真 3）すくいやすい皿

（写真 4）皿底は傾斜、深い方の縁は内側へカーブ

＜第Ⅱ期＞（平成29年10月17日～11月9日）

第Ⅱ期では、スプーンの変更を行った。

スプーンを変更する上で、母指・示指・中指で把持するため操作が安定していない事が問題点として考えられた。そこで、スプーン把持に環指・小指の尺側指が参加すると操作時の安定性が向上すると考えた。これより、スプーンの変更と訓練を行った。

［食具］（写真5）

柄の尺側が太いスプーン(尺側2㎝、橈側1㎝)

［訓練］

食事訓練でスプーンを使用する練習を行った。スプーンの把持位置の修正や個別訓練で道具を把持する練習を行った。

［結果］

尺側指も握りに参加するようになった。安定して持つ事で、こぼさずにすくい上げる事が出来るようになった。こぼす回数は1～3回であった。

（写真5）スプーン

6. 考察

評価結果よりAちゃんの上肢運動発達年齢は1歳6ヵ月であった。1歳～2歳の子供のスプーン操作は、前腕回内握りでスプーンを把持し、肩や肘を中心に操作すると言われている。皿を変更したことで、Aちゃんは皿底に沿ってスプーンを水平に保ち、左右に動かす事ができるようになった。また、スプーンを皿から上げる時にスプーンの角度調整が必要なくなった。スプーンが壁に当たる事で、口元へ運ぶ動作への切り替えができるようになった。内側のカーブにより食物がスプーンにのりやすくなった。これらにより、Aちゃんは手関節の動きを必要とせず、肩や肘の動きを使ってすくうことが可能になったと考えられる。

また、スプーンの変更で柄の尺側が太くなった事で、全指を使ったスプーン把持が可能になった。岩崎等によると、尺側を太くすると安定性が増し、手の橈側の動きが出やすくなる[1]と言われている。尺側が太くなった事で、橈側に無理な力を入れずに握ることが出来たと思われる。これにより、前腕回内握りでのスプーン操作が安定したと考えた。

今回の食具への関わりにより、手関節の動きを必要せず、肩や肘の動きですくい、前腕回内握りでスプーンの操作が安定した。Aちゃんの上肢機能は1歳6ヵ月である。この1歳6ヵ月の上肢機能に合わせて食具を選定したことで、食べ物をこぼす回数が減少したと考えられる。

7. おわりに

今回の検討により、Aちゃんが生活場面でも食具を使うようになった。今後もAちゃんの発達に合わせて食具を検討していきたいと思う。最後に当研究の実施に当たり、ご協力頂いた患者様、センタースタッフに深く感謝いたします。

【出典先】

平成29年度かがわ総合リハビリテーションセンター研究発表年報

【引用文献】

1）鎌倉矩子：発達障害の作業療法　実践編，三輪書店，2015

【参考文献】

1）清宮良昭：更衣・整容・食事動作の運動学．OTジャーナル vol.28 no.3 :196-204.1994

2）原早紀子：食事行動の発達における姿勢と運動．OTジャーナル vol.28 no.3:189-194,1994

3）村山敦美：脳性麻痺児の食事指導-神経発達学的治療アプローチ-OTジャーナル　vol.29 :430-436, 1995

4）辛島千恵子：行動分析に基づいた摂食指導-行動分析的アプローチ-OT ジャーナル vol.29 : 437-442,1995

5）山根寛、加藤寿宏：食べることの障害とアプローチ，三輪書店，2002